15　次の文章を読んで、問１～５に答えよ（本文の一部を省略したところがある）。

〈神戸大〉二〇二三年度出題

　近きころ、といひて、人に知られたるありき。法師あひ知りて、ことにふれ、情をかけつつ過ぎけるほどに、①年ごろありて、この聖のいひけるやうは、「今は、年にそへつつ弱くなりまかれば、死期の近付くこと疑ふべからず。終はり正念にてまかりかくれんこと、極まれる望みにて侍るを、心の澄む時、をして、終はり取らんと侍る」といふ。

　登蓮聞き、驚きて、「あるべきことにもあらず。今一日なりとも、念仏の功を積まんとこそ願はる〔　　ａ　　〕。さやうのはなる人のする業なり」といひて、めけれど、さらにゆるぎなく思ひ固めたることと見えければ、「かく、これほど思ひ取られたらんに至りては、留むるに及ばず。②さるべきにこそあらめ」とて、そのほどの用意なんど、力を分けて、もろともに沙汰しけり。

　に、桂川の深き所に至りて、念仏高く申し、時経て、水の底に沈みぬ。その時、聞き及ぶ人、市の如く集まりて、しばらくは、み悲しぶこと限りなし。登蓮は年ごろ見なれたりつるものをと、あはれに覚えて、涙を押さへつつ帰りにけり。

　かくて日ごろ経るままに、登蓮物の怪めかしき病をす。あたりの人あやしく思ひて、こととしけるほどに、霊あらはれて、「ありし蓮花城」と名のりければ、「(Ａ)このこと、げにと覚えず。年ごろあひ知りて、終はりまでさらに恨みらるべきことなし。いはんや発心のさまなほざりならず、貴くて終はり給ひしにあらずや。かたがた何の故にや、思はぬさまにて来たるらん」といふ。

　物の怪のいふやう、「そのことなり。よく制し給ひしものを、我が心のほどを知らで、いひがひなき死にをして侍り。さばかり人のためのことにもあらねば、その際にて思ひ返すべしとも覚えざりしかど、いかなる天魔のしわざにてありけん、まさしく水に入らんとせし時、たちまちにくやしくなんなりて侍りし。されども、さばかりの人中に、いかにして我が心と思ひ返さん。③あはれ、ただ今制し給へかしと思ひて、目を見合せたりしかど、知らぬ顔にて、『今はとくとく』ともよほして、沈みてん恨めしさに、何の往生のことも覚えず。すずろなる道に入りて侍るなり。このこと、我が愚かなるなれば、人を恨み申す〔　　ｂ　　〕ならねど、最期に口惜しと思ひし一念によりて、かく詣で来たるなり」といひけり。

　これこそげにと覚えて侍れ。かつはまた、末の世の人のめとなりぬべし。

　人の心、はかりがたきものなれば、必ずしも清浄の心よりも起こらず。あるいは、にもし、あるいは、嫉妬をもととして、愚かに、、入海するは浄土に生まるるぞとばかり知りて、心のはやるままに、かやうの行を思ひ立つことし侍りなん。すなはちの苦行に同じ。大きなる邪見といふべし。その故に、④火水に入る苦しみなのめならず。その志深からずは、いかが堪へ忍ばん。あれば、また心安からず。仏の助けよりほかには、正念ならんこと極めてかたし。〔　中略　〕

　ある人のいはく、「諸々の行ひは、みな我が心にあり。みづから勤めて、みづから知るべし。にははからひ難きことなり。すべて過去の業因も、未来の果報も、仏天の加護も、うち傾きて、我が心のほどをやすくせば、ら推し測られぬべし。かつがつ、一ことをす。もし人、仏道を行はんために山林にもまじはり、ひとりの中にも居らん時、なほ身を恐れ、命を惜しむ心あらば、必ずしも仏し給ふらんとはむべからず。をも囲ひ、る〔　　ｃ　　〕構へをして、みづから身を守り、病をたすけて、やうやう進まんことを願ひつべし。もしひたすら仏に奉りつる身ぞと思ひて、来たりて犯すとも、あながちに恐るる心なく、食物絶えて飢ゑ死ぬとも、憂はしからず覚ゆるほどになりなば、仏も必ず擁護し給ひ、菩薩もも来たりて、守り給ふ〔　　ｄ　　〕。法の悪鬼も毒獣も、便りを得べからず。盗人は念を起こして去り、病は仏力によりて癒えなん。これを思ひ分かず、心は心として浅く、仏天の護持を頼むは、危ふきことなり」とぞ語り侍りし。(Ｂ)このこと、さもと聞こゆ。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（『発心集』より）

〔注〕　○愚痴―愚かでものの道理を理解できないこと。

　　　　○沙汰―手配。

　　　　○天魔―仏道を妨げる魔物。

　　　　○宿業―前世につくった因業。

　　　　○勝他名聞―他より勝っているという良い評判。

　　　　○憍慢―おごり高ぶり。

　　　　○身灯―焼身。

　　　　○外道―仏教以外の教えを卑しめていう語。異教・異端。

　　　　○正念―乱れなく正しい信仰心。

問１　傍線部①～④を、それぞれ現代語訳せよ。

問２　傍線部(Ａ)のように思った理由を六〇字以内で説明せよ。

◎問３　傍線部(Ｂ)のように筆者が感じた理由を五〇字以内で説明せよ。

問４　空所ａ～ｄには、それぞれ、助動詞「べし」の活用形が入る。それぞれ適切な活用形に直して答えよ。

問５　この作品と同じジャンルの作品を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ　『山家集』　　ロ 　『愚管抄』　　ハ　『閑吟集』

ニ　『禁秘抄』　　ホ　『沙石集』

【解答と採点基準】

問１　①＝Ａ数年がＢ経って

Ａ＝６〔「何年も」などの表現も可。〕

Ｂ＝４〔単に「ある」は不可。〕

②＝Ａ入水するはずの前世からの因縁Ｂであるのだろう

断定「なり」・推量「む」の助動詞の訳が適切でなければ、全体０。

Ａ＝７〔「さるべき」の内容の補いがなければ、減点５。〕

Ｂ＝３

③＝Ａああ、すぐさまＢ私が入水することをＣお引き止めくださいよ

Ａ＝２〔「すぐさま」は「今すぐ」「直ちに」なども可。〕

Ｂ＝５〔「入水する」という内容の補足がなければ不可。〕

Ｃ＝３〔尊敬語の訳が不適切なものは不可。〕

④＝Ａ火や水に身を投じて死ぬ苦しみはＢ並大抵ではない

「なのめならず」の訳が不適切な場合、全体０。

Ａ＝７〔「焼身や入水によって死ぬ」の意が明らかでなければ不可。〕

Ｂ＝３〔「並々でない」なども可。〕

問２　Ａ蓮花城蓮とは長年親しく交際し最期まで世話をした私が恨まれるはずはなく、Ｂ彼は深い信仰心により往生したはずだとＣ登蓮は思うから。（60字）

Ａ＝４〔蓮花城と登蓮の関係に触れていなければ不可。〕

Ｂ＝４〔「蓮花城が往生した」という内容がなければ不可。〕

Ｃ＝２〔人物名はなくても可。しかし、「登蓮」以外を記した場合は全体０。〕

問３　Ａ蓮花城は信仰心の浅さに気づかず、Ｂ死の間際に命を惜しんだことで仏の加護が得られず、Ｃ物の怪になったから。（50字）

Ａ＝４〔蓮花城の信仰心に触れていなければ不可。〕

Ｂ＝４〔命を惜しんだことに触れていなければ不可。〕

Ｃ＝２〔「物の怪」は「霊」でも可。〕

問４　ａ＝べけれ　　ｂ＝べき　　ｃ＝べき　　ｄ＝べし

問５　ホ

【現代語訳】

　近頃、蓮花城といって、人に知られた聖がいた。登蓮法師は親しく交際して、事あるごとに、絶えずいたわりの心をかけて暮らしていたところ、問１①数年が経って、この聖が言ったことには、「今は、年とともに体が衰弱しておりますので、死期が近付いていることは間違いないでしょう。最期は（乱れなく）正しい信仰心によって亡くなりますことは、この上ない望みでございますので、（迷いがなくなり）心が澄み切る時に、入水をして、死のうと存じます」と言う。

　登蓮は（これを）聞き、驚いて、「それはあってはならない。たとえもう一日であっても、念仏の功徳を積もうと祈願なさるべきだ。そのような修行は愚かでものの道理を理解できない人のする行いである」と言って、忠告したけれども、まったく気が変わることなく決意を固めたことと思われたので、「このように、これほど決心なさったからには、制止することはできない。問１②入水するはずの前世からの因縁であるのだろう」と言って、その時の用意など、協力して、一緒に手配をした。

　（当日、蓮花城は）最後に、桂川の深い所に達して、念仏を声高く申して、しばらくして、水の底に沈んだ。その時に、（このことを）聞き及んだ人々が、市のように（大勢）集まって、しばらく、敬い悲しむことはこの上ない。登蓮は長年親しく交わったのになあと、しみじみとしく思われて、何度も涙をこらえながら帰った。

　こうして数日経つにつれて、登蓮は物の怪が憑いたかのような感じの病になる。周囲の人は不思議に思って、異常なことだと言っていると、霊が現れて、「生前の蓮花城（である）」と名乗ったので、「このことは、なるほど本当にと（納得できることとは）思われない。長年親しく交際して、（蓮花城が入水したその）最期まで決して恨まれるはずのことはない。まして、（蓮花城の）発心（＝悟りを得ようとする心を起こすこと）の様子は並一通りではなく、貴くお亡くなりになったのではありませんか。いずれにしてもどんな理由であろうか、思いもしない様子で（このように）やって来たのであろうか」と言う。

　物の怪が言うことには、「そのことだ。（あなたが）適切に（入水を）制止なさったのに、（私は）自分の心の程度をわからないで、取り返しのつかない死に方をしました。格別に人のためにしたことでもないので、死の間際に決心が変わるだろうとも思われなかったけれども、どのような仏道を妨げる魔物のしわざであっただろうか、確かに水に入ろうとした時に、突然心残りになりました。そうではあるけれども、あれほどの（多くの）人の中で、どのようにして自分の判断で（入水することを）考え直すだろうか（いや、考え直すことはできない）。問１③ああ、すぐさま私が入水することをお引き止めくださいよと思って、（あなたと）目を見合わせたけれども、そ知らぬ顔で、『今となっては早く早く』とせきたてて、（そのまま水に）沈んでしまった恨めしさのために、どんな往生（＝極楽浄土に生まれ変わる）のことも（念頭から去って）思い出さない。思いがけない道に入っているのであります。このことは、私の愚かなる過ちであるので、人を恨み申し上げるはずではないけれども、最期に名残惜しいと思った瞬間の思いの結果で、このようにやって参ったのだ」と言った。

　これこそ、本当に前世につくった因業と思われます。一方ではまた、きっと後世の人の訓戒となるだろう。

　人の心は、はかりがたいものなので、必ずしも清らかで素直な心からも起こるとは限らない。ある場合は、他より勝っているという良い評判にも執着し、ある場合は、おごり高ぶりや恨み妬みを原因にして、愚かにも、焼身や入海するのは浄土に生まれ変わる（ことだ）とばかり思い込んで、心が勇み立つのに任せて、このような修行を決心することがきっとあるのでしょう。（これは）とりもなおさず異教・異端による苦しい修行と同じである。大いに因果の道理を無視した見方というべきである。そういうわけで、問１④火や水に身を投じて死ぬ苦しみは並大抵ではない。その志が深くなかったならば、どのように耐え忍ぶだろうか（いや、耐え忍ぶことはできないだろう）。死後、地獄道に落ちて受ける苦しみがあるので、また心配である。仏の助けよりほかには、乱れなく正しい信仰心（の状態）であることは極めて難しい。〔中略〕

　ある人が言うことには、「すべての仏道修行は、みな（修行をする）自分の心にある。自分で修行に励み、自分で悟らなければならない。他人には相談しがたいことである。だいたい過去に積んできた（果報の原因となる）善悪の行いも、（その結果としてもたらされる）未来の報いも、仏様の加護も、おとろえて、自分の心の持ち方を安寧にするならば、自然と（他人にも）見当がつくはずである。何はともあれ、一つのことを明らかにする（のが関の山である）。もし人が、仏道を修行するために山林にし、一人広野の中にも閑居するような時、（そんな中でも）やはり身を心配し、命を惜しむ心があるならば、必ずしも仏が助け守りくださるだろうとは期待するべきではない。垣や壁をも（用いて）囲い、遁世すべき用意をして、自分で身を守り、病いを癒して、（そのうえで）徐々に（信仰が）深まるのを願うべきだ。もしひたすら仏に差し上げた身であると思って、虎や狼が来て（自分の身を）害するとしても、とりたてて恐れる心がなく、食べ物がなくなり飢えて死ぬとしても、嘆かわしくなく思われるほどになったならば、仏も必ず守り助けてくださり、菩薩も聖衆もやって来て、お守りくださるに違いない。すべての悪鬼も毒ある獣も、（修行を妨げる）機会を得ることはできない。盗人は良心を起こして立ち去り、病は仏の力によってきっと癒えるだろう。これを理解せず、心は（信仰）心として浅く、（それでいて）仏様の加護を期待するのは、危険なことである」と語りました。この意見は、そのとおりだと思われる。